

タマサート大学日本研究講座

桂 満 希 郎

1 日本研究講座について

昨年1965年11月よりタイ国タマサート大学教養学部
に、日本研究講座なるものが設置されることとなっ
た。私は1964年6月よりチュラロンコン大学文学部に
留学中であったが、これを途中で打ち切り、同講座の
日本語インストラクターとして新しく仕事を始めるこ
とになった。この講座は、日本の外務省文化事業部よ
りタマサート大学に寄付され、河部利夫教授（東京外
国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）をヘッド
とし、それに私と木村宗吉氏（慶応大学）との2名
の助手が加わり、合計3名の日本人により構成され
るものである。こちらの大学では、6月から10月ま
でを前期、11月から3月までを後期とし、1年を2期



写真1 タマサート大学教養学部構内

に分けている。したがって、この日本研究講座は1965
年度の後期より正式に発足したわけである。なお、
ここでいう「教養学部」というのは、“Faculty of
Liberal Arts”と英訳されているが、日本でいう2年
間の教養課程というのとは全然別のものであって、法
学部や経済学部などの学部と同列に並ぶ1つの学部の
名前である。

タマサート大学は、その名前の示す通り、元来は法
律を専門とする大学であったが、それに他の学部が徐
々に追加されて、現在では総合大学としての形を次第
にととのえつつあると見てよいだろう。同大学の学
部を設置順に記すると、法学部、商学経営学部、政治
学部、経済学部、社会学部、行政学部、教養学部の7
学部で、最後の教養学部は1962年に設置されたもので
あり、数学科、統計学科、文学科、心理学科の7つの
科を有し、毎年の入学定員数は150名である。なお、
全学の入学定員数は約2,000名ということになってい
る。日本研究講座は、この教養学部の言語学科に設け
られたものである。どの学科にも共通していえること
は、語学に力を入れているという点であり、各学科と
も全学年を通じて英語とタイ語とを必須としている。
言語学科においては、2年以上は、更に日本語、中国
語、フランス語、ドイツ語のうち1つを選択すること
になっている。これら4つの言語は、言語学科の学生
のみならず、他の学科の学生も聴講できる仕組みにな
っている。どの学科の学生も語学は一生懸命やって
いるようである。ただ、「言語学科」といっても、言
語学の discipline はかなりとぼしく、どちらかといえ
ば実的な語学が主になっており、「語学科」とでも
呼んだ方がより適切かも知れない。

タイ国では、少なくともバンコックにおいては、日
本語を習いたいというものは非常に多い。この日本研
究講座の他に、私立の職業学校、日本留学生会、個人塾
のようなものまで含めると、現在日本語を教えている
所はかなりの数にのぼると見てよいだろう。日本語を
習いたいという理由には、日本の会社に就職したいか
らというのから、将来は日本に留学して自分の専門の
研究を進めたいからというのまで色々あるようだが、
とにかく日本語あるいは日本を知りたいという気持は
かなり強いと見てまちがいないだろう。そのなかで、
この日本研究講座は、単に日本語を使うという技術だ
けにとどまらず、言語をも含めて日本の文化、社会等を

理解してもらうことを目的とするもので、「日本語講座」ではなくて「日本研究講座」と名づけられたのも、こういった理由によるものである。タイ国における1つのモデルケースとでもいうべきもので、今後この講座によせられる期待が大きいだけに、私達の責任も重大といわねばならない。また、将来においては、ただ日本政府が日本人を送ってよこすというだけでなく、タイ人のすぐれた日本研究者を養成し、タイ人の研究者にこの講座の主導権をうつそうという計画である。

2 授業について

11月の授業開始前には、果してどれだけの学生が出席を希望するかと思われたが、実際に開講してみると、私が予想していたよりは多いことがわかった。学部長の Adul 博士によると、フランス語、ドイツ語の選択希望者よりも日本語選択を希望する学生の方が多いくらいだとのことである。この講座が設置されるまでの間は、大使館、Japanese Information Service、留学生の人達の手によって日本語が教えられており、2年と4年との2学年があったが、本講座が正式に設置されるに当たって、3年生から新たに希望者をつのり、1クラスを構成するに至ったのである。2年と4年とは言語学科の学生よりなるが、3年は上に述べたような事情で、歴史学、心理学等の他学科からの聴講者よりなる各学年の男女別人数を示すと表1の通りである。

表1 各学年の人数

	専攻	男子	女子	合計
2年	言語	1	6	7
3年	心理・歴史	7	14	21
4年	言語	1	7	8

女子学生の多いことは、チュラロンコン文学部ほどではないにしても、この国のどの大学についても多かれ少なかれいえることである。また、3年は他学科からの聴講より成るため、単位に関係しないためか、人数が不同で一時は30名を越えることもあったが、現在では10数名となっている。しかし、一定期間をすぎると人数も定まって来て、それらの学生に関する限りは、言語専攻の学生と同じ程度に熱心だといえる。言語学

科の学生にしても、必ずしも全員が日本語という言語そのものを研究しようという者ばかりではなく、日本に関する他の分野の研究を進めるための手段としての日本語を身につけようという学生が主となっている。全学年を通じての合計人数が36人で、教自体はたいしたものでもないが、フランス語やドイツ語を選択する学生の数から見て、これはかなり大きな割合を占めるといってまちがいないだろう。



写真2 古いタイ国の伝統的な学生の像

授業時間数は全学年とも1週間に6時間となっていて、そのうちの2時間がランゲジ・ラボラトリに当てられている。なお、1時限は50分であり、日本の大学のそれと較べて短い様に思われるが、言語の学習にはこの方がより能率的だと私は思う。全学年を通じての授業時間数の合計は1週18時間となるが、これらはすべて日本語の授業であって、これとは別に歴史学科との共通講義として、河部教授が「極東アジア現代史(1914年以降)」を担当されており、これが1週3時間である。各人の受け持ち時間を示すと表2の様になる。

表2 講義担当時間数

		2年	3年	4年	計	備 考
単位取得人員		7	21	8	36	
担当時間数	河部	0	1	1	2 (歴史3)	日本語, 日本文化
	木村	3	2	3	8	文字, 読み方
	桂	3	3	2	8	音声, 文法
	計	6	6	6	18 (歴史3)	

この表でわかる様に、担当者が3名、学年が3学年となっているので、各人が1学年を受け持ちということにしてもよいわけであるが、少なくとも現段階ではすべての担当者に全学年が当るようになっている。最初の段階から1人の担当者が全責任を持って徐々に段階を追って教えて行く方がよいか、現在の方が良いかは問題であろう。私は前者の方がより良い様な気がする。教える側からすればたがい連絡を取ったうえで教えているつもりでも、習う方にしてみれば、3人が入れ変り立ち変り別の教科書で多少とも異った話をするのでは、実際問題として、どうしても混乱の感をまぬがれないのではないかと思う。少なくとも、今まで日本語を全然知らなかったものに最初から教える際にはこのことがいえると思う。ただし、これは日本語の授業に関してのみ言えることであろう。

授業の内容としては、別にこれといって変わったところはない。日本における英語なりフランス語なりの授業を日本語に置きかえたら似た様なものになるだろう。現在使用している教科書は——もともと極めてとぼしいが——国際学友会日本語学校の「よみかた」、「日本語読本1」、「NIHONGO NO HANASIKATA」および、大学書林の「日本語4週間」である。言葉を学習する順序からいえば、まず話す練習から始めて、徐々に文字を導入して行くのが本道であろうが、本講座では最初から文字（ひらがな）を教えて、授業はすべてひらがなを使用して進めて行き、後にかたかな及び漢字を入れて行くことにしている。これは、時間数が不足なうえに、教室から一步出れば日本語を聞いたり見たりすることはほとんど皆無という環境を考えれば、文字を使用することによって、学習したことを固定させるようにつとめた方がより効果的だと思われるからである。ただ、話すことから始めるにしても、最初か

ら文字を教えるにしても、反復練習ということは非常に大切だと思う。例えば、2年の場合、「よみかた」程度なら理解できるわけだが、その理解の仕方が、単語を一つ一つタイ訳し、それをもう1度つづり合わせてようやく意味が解るといったやり方で、1度自分の言語に訳すことなしに一つの文章を全体として把握する訓練がかけられている。このためには、色々なパタンの文について練習を重ねることによって、自動的に理解する習慣を身につけるより仕方がないと思われる。各学年に週2時間割り当てられたラボラトリーの時間は、わずかな発音練習を行うだけで、残りの時間は日本に関するスライドを見せたり、通常の授業を行ったりすることになっている。ラボラトリーを使用するには、資料を収集・整理し、完璧な準備をととのえたりえでなければ効果をあげることができない。今年は、留学打ち切り後に1度国を出て、授業開始前わずか10日ばかりの時に帰国したため、準備をととのえる余裕がなかった。このためには、教える方の者が行ったり来たりしてはだめで、長期間にわたって腰を落ちつけ、年がら年中授業の準備をしなければならないと思う。

今年度は11月の後期から始めたために、あとわずか1カ月半くらいしか残っておらず、準備期間の方も不足していたが、来年度の新学期からは、まず年間の授業時間数を計算し、それにもとづいて年間計画を立て、それだけではどんなことがあってもたつき込むようにしなければならないと思う。こちらは1週5日制であるうえに、何だかんだといって休みの多いところであるから、その時になって不意に休日であることに気づく様な事のないようあらかじめ計算に入れておかなければならないと思う。何かの都合で授業がぬけた様な場合には、夏休みにくい込んでも補講するくらいの必要があると思う。また、ランゲジ・ラボラトリーは、教える方に十分な準備ができていないとむしろ非能率的で、普通の授業を行った方がましだということになるので、来年度もこれを使用するとなると、授業開始前の数カ月を資料の作製、テープの準備などに費やす必要があるだろう。このラボラトリーの年間計画を立てて、これを教室における授業とうまく平行させて進めるようにしなければ、十分な効果を上げることはできないだろう。ただ教科書をテープに吹き込んだというだけでは仕方がないと思う。このラボラトリーの準備は一大仕事である。

この3月10日から試験が始まり、採点・成績表の作成などを終わると少なくとも3月末日になるだろう。それから私は一時出国しなければならないことになっているが、出来るだけ早く帰って来て、来年度の授業にそなえ、年間計画の作成、ラボラトリーの準備、教材の整備などに残る2カ月余りをフルに費やさなければならない。また、時間割決定や教室の割り当てなどの際には、必ずその場に出席して、他の者に取られてこちらが不便な目に会う様なことのない様になさなければならない。先にもふれた教科書やそれにとまなう資料の作成となると、これは数カ月でかたずくものではな

いが、現在のところ、少なくとも年間のカリキュラムを立てて、それにしたがって授業を進めるようにしなければならないと思う。今のところ、まず私に与えられた期間を利用して、日本語とタイ語との研究、両言語の対照を進めることを主な目的としている。

2つの言語を比較する場合、まず音声の面から始めるのが普通であり、またこれが最も手につけやすいものである。だから、さし当っては、タイ語と日本語との音素体系を対照し、どの点がタイ人にとって問題となるかを見きわめる必要がある。これをもとにして練習用の教材を作成し、ラボラトリーの時間数を計算し、1年間の計画を立てたいと思っている。それより更に進んで、シンタックスに入ると、そう簡単には行かなくなる。これには相当な期間を費やす必要があるだろう。とりあえず来年度の授業開始までに、日本語とタイ語との音素体系の対照を行い、これにもとづいてラボラトリー用の教材を作成することを、この2カ月の休暇の目標としている。音声などは大して重要ではなく、読むことこそ大切なのだとする意見もあるが、私は音声と読解力とはそう簡単に分離できるものではないと思う。最初に日本語の音声習慣をしっかりと身につけておかないと、後に読む練習、書く練習あるいは話す練習をやっても、能率が上がらないのではないかと思う。読むことが大切であれば、さればこそ音声の面から徹底して行わなければならないと考えている。

3 後 記

私が、この日本研究講座の仕事始めるに当って、外務省、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、京都大学東南アジア研究センターに、大変お世話になり深く感謝する旨を記しておきたい。また、この原稿を書くに当り、「タマサート報告」第1号および第2号を参照した旨記しておく。

(1966年1月30日バンコックにて)

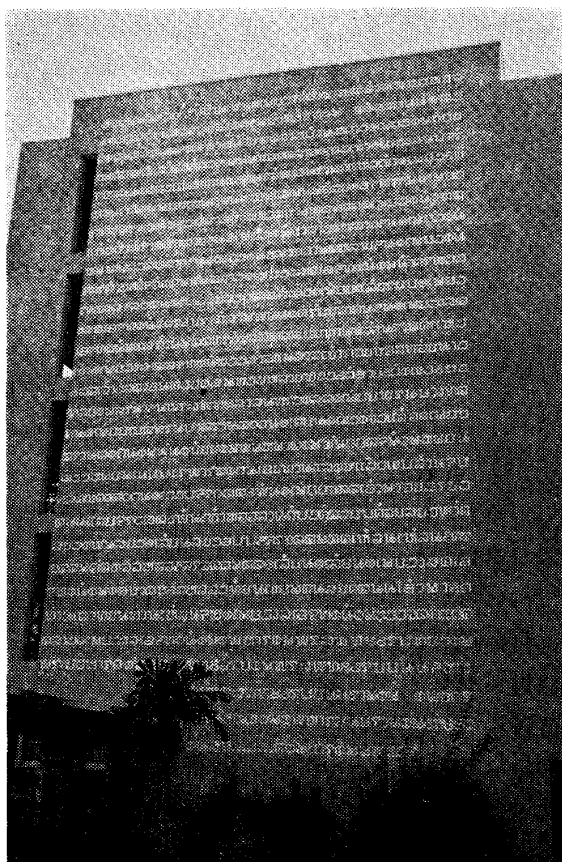


写真3 教養学部の壁にほられた Ram Khamhaeng 王の碑文